

## 今だからこそできる！「川上宣言」の実現

～オンラインコミュニティかわかみらいのその先に～

川上村 加藤 満



### 1. はじめに

2020 年初頭より新型コロナウイルスが全世界を席卷し、日々の生活に大きな変化が生じた。日本国内を見渡してみても、感染対策を進めるうえでも急速なリモートワークの普及が促され、オンラインでつながる仕組みが様々な箇所で活性化されてきた。一方、国連を中心に SDGs 持続可能な開発目標の達成が掲げられており、未来に向かって持続可能な環境を構築していくことは、現代を生きる我々に課せられた使命である。

川上村においては、吉野林業を中心に最盛期 8,000 人を擁したが、ダム建設や都市の一極集中等により過疎化が進み、持続可能性が危ぶまれている。その中で、平成 6 年より紀の川(吉野川)源流部に位置する村として進めてきた「水源地の村づくり」は各方面から高い評価をもらい、川上宣言を基軸とする村づくりの方向性は誤ったものではないだろう。川上村が持続可能な地域となるために、村内外問わず多様な人が地域に関わる必要がある中、本稿では、川上宣言発信以来の交流の取組の到達点を整理した上で、近年、私自身が立ち上げたオンラインコミュニティの立ち位置について考察し、最終的に村づくりにどのように寄与できるかとまとめた。

### 2. 川上村が進めてきた水源地の村づくり

#### (1) 川上村の概要

川上村は、奈良県吉野郡東部の三重県境に位置し、奈良県東吉野村、吉野町、黒滝村、天川村、上北山村、三重県大台町、松阪市に接している。周囲には、南に山上が岳を主峰とする大峰山脈、東に大台ヶ原に連なる台高山脈、北には吉野山をそれぞれ擁している。また、東西 20.24 km、南北 18.84 km と奈良県第 5 位の面積 269.26 km<sup>2</sup>を有しており、中央部を 1 級河川吉野川(紀の川)が流れている。

人口は、1,156 人(令和 2 年国勢調査)であり、気候は、年平均 13.5℃と比較的温暖である。年間降水量は約 2,000 mm、特に大台ヶ原付近では年間 4,000 mm以上に達し、全国有数の多雨地帯となっている。このためスギ、ヒノキの生育に適し、日本の人工美林の一つ「吉野杉」の主産地を形成している。

本村の歴史は、竪穴住居や環状配石遺構の検出された宮の平遺跡が、吉野川最上流部に位置する大規模な縄文遺跡であることが判明し、縄文時代の頃、既に人々が断続的に訪れ、豊富な山川の幸を糧として生活を送り、環状配石遺構を祭祀的な空間として利用したとされている。村内には、後南朝時代の歴史も多く残り、1457 年(長祿元年)悲憤の最期を遂げた自天王をしのぶ朝拝式は現在も続けられている。

本村の中心部を流れる 1 級河川吉野川(紀の川)は、和歌山県和歌山市に向けて流れてお

り、本村はその最源流部に位置する。本村には、洪水対策を主目的とした大滝ダム、農業用水供給を主目的とした大迫ダムの二つのダムがあり、建設前の約 1/3 世帯が水没世帯となる公共事業であった。当然激しい反対運動が繰り広げられたが、最終的に村としてダムを受け入れ、川の源流部にあり流域の水源地である川上村の誇りと責任を軸に村づくりを展開していくこととなる。そうして始まったのが「水源地の村づくり」である。平成 6 年第 3 次総合計画を「吉野川源流物語」として発表し、平成 8 年には、全国に向け、源流部に住むものとしての想いを「川上宣言」として発表し、本村の目指すべき理想像として位置付け、川上宣言の一つ一つの具現化を行っている。平成 27 年に第 5 次総合計画を発表し、テーマを「都市にはない豊かな暮らしの実現」と位置づけ、自然の中で生きてきた川上村本来の資源を磨き、それを生かす、そのためにみんなが村づくりを支えあい、共感し、次世代に伝えていく日々の実現を図っている。

## (2) 川上宣言の発信

ダム建設の賛否に揺れる中、昭和 56 年に大滝ダム建設着工同意に関する覚書が締結され、その後大滝ダム本体の工事が始まることになる。林業の衰退、過疎化の進行、ダム建設による村中心部の水没という中、従来からの村づくりのからの方向転換を迫られた。大きな転機となったのは昭和 61 年に沈みゆくダム湖で開催された「全国湖底サミット」であった。湖底サミットでの長野県川上村長との出会いをきっかけに、同様な課題を抱えていた全国の「川上」と名のつく町村との交流がスタートした。昭和 63 年には 6 つの川上町村が一堂に会し「全国川上サミット」が開催される。平成 5 年には東京都文京区本駒込(後に浅草に移転)に全国「川上」東京事務所が開設される。

そういった交流の中、村民や村の拠り所として、何にそれを求めるか。村はこう考えた。

「川上村の位置づけは、吉野川・紀の川の最上流に位置し、大迫ダム、大滝ダムでその豊かな水を下流のために守っていくことである。そして、ダム事業で犠牲になったことを言うだけでなく、自らがその役割を果たしていくことの覚悟をもって、大切な水源地をみんなで守っていこうと呼びかけるときである」

(大滝ダム誌より)

そして、その想いを明文化したものこそ、平成 8 年に全国川上町村連絡協議会として発信した「川上宣言」である。川上宣言は、自分で自分の生き方を縛りながらも、自然との共生の仕方を長い目で見つめ、下流域のために努力することを誓ったものであり、このことは上流だけで果たしていけるものではなく、上下流が一緒になって進めていくよう呼び掛けていこうという決意を表現したものでもある。

### 【川上宣言の発表文】

川上の人たちは、自分たちが生きるために巧みに森林を利用し、その価値を生かして自然との付き合いを育て、林業を通して山と水を守ってきました。もちろん、下流の人たちのためにそうしてきたわけではありません。今までは川上の人たちにとって、生きることが同時に、自然を守ることだったのです。

しかし、生活水準が上がり、過疎があらわになる中で、川上では、以前のような暮らしの中で山と水を守ることはできなくなってきました。森を育て、山を守ることでできる人間の新しい仕組みが急速に求められています。これはまさに創造を必要とすることです。下流の人たちの参加も必要です。そしてそこから都市の人たちの自然とのふれあいも、さまざまな形で生まれます。豊かな国土の保全、さらに地球環境の問題への解答も生まれてくるに違いありません。私たち川上は、森を育て山と水を守る素晴らしい仕組みづくりのために、頑張ることを誓います。そして今ここに、川上の名を冠する6つの自治体が手を携えて「川上宣言」を發します。



1996年8月1日、全国に「川上宣言」を發借しました。

- 私たち川上は、  
かけがえのない水がつくれる場に暮らすものとして、  
下流にはいつもきれいな水を流します。
- 私たち川上は、  
自然と一体となった産業を育て山と水を守り、  
都市にはない 豊かな生活を築きます。
- 私たち川上は、  
都市や平野部の人たちにも、川上の豊かな自然の価値に  
ふれあってもらえるような仕組みづくりに励みます。
- 私たち川上は、  
これから育つ子供たちが、自然の生命の躍動に  
すなおに感動できるような場をつくります。
- 私たち川上は、  
川上における自然とのつきあいが、  
地球環境に対する人間の働きかけの、すばらしい見本になるよう  
努めます。

図 1 川上宣言

そして川上宣言の思想を中心に据えた村づくり「水源地の村づくり」が平成6年発表の第3次総合計画「吉野川源流物語」から始まる。川上宣言は川上村にとどまらず、国民的な運動へとつなげていく意図をもって、自らの流域を拠点に交流活動を積極的に展開すると共に、国の中枢である東京及び全国各地の流域とも交流を深めていく。

### (3) 川上村における交流の取組

川上宣言発信以来続けてきた交流を、その目的に分けて整理し、今日の課題を見出していく。

#### ◆上下流交流

川上宣言の基本にあるのは、川でつながる人のつながりだ。平成11年、吉野川(紀の川)の源流部に残された原生林約740haを約10億円かけて村が購入し、吉野川源流一水源地の森として保全している。平成14年には、公益財団法人吉野川紀の川源流物語を設立し、森と水の源流館という村づくりの情報発信拠点を整備し、上下流交流を促進させる。平成15年には、最下流の和歌山県和歌山市と「吉野川・紀の川水源地保護に関する協定書」を締結し、和歌山市民が直接森づくりに関わる「和歌山市民の森づくり」がスタート。小学校においても、川上の小学校と和歌山市加太の小学校の交流がスタートし、夏休

みを活用しお互いに訪問し合っている。行政としても県の垣根を超えて奈良県及び和歌山県の吉野川紀の川流域市町村と吉野川紀の川流域協議会を組織し、川でのつながりを意識できる事業を展開している。

近年では、直接川は流れていないが水管を通じて農業用水が供給される吉野川分水の受益地である奈良県大和平野も流域の一つと捉え、田植・稲刈や源流体験を通じた小学生同士の交流事業を主とする水をつながりプロジェクトも実施している。

#### ◆源流部との交流

全国の川上との交流の基盤となった全国川上町村連絡協議会は市町村合併等の影響もあり、平成 16 年 3 月に一定の役割を終える形となるが、それまで東京事務所を中心とした各職員の交流や住民同士の交流会、全国川上商工会サミットの実施など官民の垣根を越えて交流を継続してきた。

そして、平成 17 年には全国各地の河川の最上流に位置する自治体が結集し、全国源流の郷協議会(会長：山梨県小菅村)を組織し、国民に広く源流の現状や大切さを伝えるために、「源流白書」を作成し、全国源流サミットなどを通じて、源流が地域として存続していけるよう運動を展開している。

#### ◆林業村としての交流事業

日本三大人工美木の吉野杉の産地である川上村で、吉野杉の良さを遊びの中で感じてほしいと昭和 61 年にはじまった全日本そまびと選手権大会。川上宣言の思想に通じる暮らしの中で山を感じる瞬間の一つであったことは間違いない。平成 17 年の 20 回大会を最後に終了することとなるが、全国各地から参加者が訪れ、村の暮らしのど真ん中にある木とのふれあいを通じて交流を深めていった。

平成 10 年には川上村木匠塾が産声をあげる。建築を学ぶ学生を対象に木造建築の材料となる木について本物を知って体感してもらおうという取組である。実際に木を切って出材し、それを使って一つのものを作り上げていく。建築業界に関わる者にとってその材料がどんどこで生まれて育てられ市場に出てくるのか、身をもって体感してもらおう。吉野林業の地である川上村だからこそ成り立つ交流事業である。ただ、半年間のプログラムが終わったら関わりがなくなってしまう学生も多く、交流を続けられる仕組みづくりが課題である。

#### ◆学生を中心とした若者との関わり

旧国土庁のモデル事業「若者の地方体験交流支援事業」を経て、平成 12 年から村の取組として地域づくりインターン事業を実施している。主に都市部の学生をターゲットに 2 週間程度村に滞在し、村の暮らしを五感で感じてもらう、そして川上村の応援団の一人として活動してくれることを願うものの、インターン終了後のつながりの維持が課題である。

なお、近年では、川上村で暮らす人と暮らしてみたい人をつなぐことを目的に、地域お

こし協力隊 0B が一般社団法人おおずみ舎を設立し、地域の中と外をつなぐ案内人として活動している。村とも協働してふるさとワーキングホリデーを実施し、一定期間遊びながら暮らすプログラムを運営する中で、村と新たに出会い関わる人材を求めている。

#### ◆教育関係の交流

公益財団法人吉野川紀の川源流物語を中心に、川上村における地域資源を教材にしながら小学校の先生方と共に ESD(持続可能な開発のための教育)につながる授業プログラムの構想、実施、その支援を行っている。吉野川(紀の川)流域の先生方を中心に参加を得て、令和 2 年からはオンライン実施に移行し、全国の先生方とも実施している。その他、出張源流教室として、各学校で水を通じたつながりを感じてもらうため、本村への校外学習なども行っている。

また、連携協定を締結している大阪工業大学と「源流学」という協働授業を進め、村民も講師に参加してもらい水源地の村づくりを学びながら、実際の課題を見つけ解決を目指すプログラムを展開している。

村ではこのような交流事業を進めてきたが、その目的を定めるにあたり川上宣言が道しるべとなっていたことは間違いない。また、村を訪れる人にとっても、川上宣言があるからこそ川上村の目指すところを理解できる。こうしたメリットは川上宣言の存在意義であると思う。

また、川上宣言を基軸とした交流の到達点としては、意識的か無意識かは別として、川上宣言の役割を担う人を増やしたことではなかろうか。川上宣言は村として大切にすべきことを示した明確な目標であり、自分の関わり方を見つけやすくなったところもある。川上宣言とふれることで、村が向かっているところとそこへの手段を確かめることができるため、大きな方向性がずれることはない。

一方、それぞれの交流事業が単発に終わっている側面も否定できない。交流先の人に焦点を当てたとき、過去の参加者とのつながりは不足しているし、事業を超え参加者同士がつながる仕組みづくりは未だ足りていないと考える。

川上宣言は、具体的な姿を示しながらも読み手に判断を委ねて、余白を残して文章を止めている。そこにどう関わっていくかはそれを受け取った人に委ねられており、そこが川上宣言のよい部分の一つである。様々なことをきっかけに川上村に関わった人たちが継続的につながる仕組みが必要とされている。

### 3. 他地域との比較

川上村は、川上宣言を用いて自らの立ち位置を定め、地域づくりに踏み出してきたが、同じ環境にある地域の取組から川上村に必要な要素を考えてみたい。

#### ◆山梨県早川町の上流文化圏構想の取組

山梨県南西部に位置し、南アルプスを挟み静岡県と接している山梨県早川町。ピーク時の昭和 35 年には人口 10,000 人を超えたが、様々な要因で減少の一途を辿り、令和 2 年の国勢調査では 1,098 人となっている。その中で、過疎化の抑制・人口増加という地域の実

態に合わない目標はあえて掲げず、それよりも、急激な近代化の進行こそが上流域に様々な問題をもたらしたと位置付け、平成 6 年に第 3 次総合計画で上流文化圏構想を打ち出した。上流文化圏構想は、水を命の源となぞらえ、その源である上流域の自然環境と、山村生活の中で地域の先人が培ってきた農山村文化を見直すことから地域づくりを始め、真に人間らしく暮らすことのできる地域の創造である。

平成 8 年には日本上流文化圏研究所を設立し、山村の暮らしの価値を伝え、担い手を育て、課題の解決を進めている。地域資源を調査し、町民の暮らしに光を当てる「2,000 人のホームページプロジェクト」や町民参加型のガイドブック「めたきけし」の出版を通じて地域への自信と愛着を取り戻し、掘り起こした資源活用の助成の仕組みを作り上げた。町外のサポーターを集め、体験型観光を促進するなど町外との連携も積極的に推進している。また、町の情報誌として平成 15 年 9 月に創刊された「やまだらけ」は、早川の魅力や山村の価値の発信を目的に、発行され続けている。町外の学生など早川の虜になった有志で作られるやまだらけは町外と町内とをつなぐツールとして活用されている。早川町では、あくまで町に関わる一人一人が主人公であり、町民自身の取組をサポートする体制が整えられているように見える。

#### ◆山梨県小菅村の源流の村づくり

山梨県の東北端に位置し、東京都奥多摩町と接する県境の村。他の中山間地同様、昭和 30 年には、2,244 人の人口を擁していたが、令和 2 年の国勢調査では 684 人となっている。村の 95%を山林が占め、周囲を 1300m～2000m 級の高い山々に囲まれる。厳しい自然環境の中、着目したのは、小菅村が首都圏を流れる多摩川の源流域に位置する点であった。多摩川流域には 400 万人を超える住民が暮らしており、この流域との交流と連携を深めようと源流にこだわった村づくりが始まる。小菅村の言う源流は単なる水の源という意味だけでなく、古より引き継がれてきた人々の生活や文化の原点、動植物や自然の原風景など、広く「源」を意味している。

昭和 62 年から「水と火と味」をテーマに、多摩源流まつりを開催し、郷土食の提供やヤマメの掴み取り体験など流域住民へ広く「多摩源流小菅」を PR するとともに、村民が一役を担い、住民総参加による手作りの祭典を開催してきた。また、多摩川源流研究所を開設し、源流から下流域への情報発信と交流事業の展開を積極的に行い、東京農業大学との連携から多摩川源流大学を開校し、首都圏の大学との連携も進んでいる。源流をテーマに村民と流域住民の参加による村づくりの基本構想は樹立され、「源流」という言葉は村づくりの中心を担っている。

小菅村の「ひと」、「もの」、「資源」を活用し、多摩川の上下流連携から人的・資金的な枠組みづくりをミッションとして掲げた NPO 法人多摩源流こすげが平成 21 年に誕生した。源流域と下流域をつなぐ機関でもあり、多摩川源流体験教室の継承や自然体験プログラムの構築、起業や生業づくりを目的とした地域おこし協力隊の受け入れの場としても一役を担っている。近年では、村全体を一つのホテルと位置づけ空き家を客室として貸し出す取組など、多様な地方創生策を実施している。

#### ◆川上村に欠けている要素

早川町や小菅村の取組例を見て、川上宣言が大事にしている思想と相通じるものがある。過疎化が進む中で、ハード面での過疎対策もちろん重要ではあるが、地域がそこにあるものに目を向け地域づくりを行っている。それぞれ上流部に位置する状況をメリットとして捉え、上流文化圏や源流、水源地など言葉は多少違うとしても、人が暮らしていく上で欠かせない地域であり、それを守り続ける意思表示を続けてきた地域である。日本上流文化圏研究所や NPO 法人多摩源流こすげなど中間支援組織を立ち上げている点も特徴の一つである。地域おこし協力隊のマネジメントなど、地域内外との関わりを生み出しており、関係人口の質の向上につながっている。

川上村の場合は、理念として「川上宣言」を打ち出して、村づくりに取り組んできた。中間支援組織なる公益財団法人吉野川紀の川源流物語を設置し、流域交流をはじめ積極的に村内外をつなぐ取組も続けてきた。しかし、行政主導の傾向は否定できず、村づくりの中にどれほどの村民が関わっていたか懐疑的な見方もある。早川町や小菅村では、一人一人に役割を持たせ、自分自身が地域づくりを担っていると意識的であれ無意識であれ、そういった状態を作り出そうとしていたが、それは川上村に欠けているピースではないかと思われる。

川上宣言以来の展開で、必ずしも十分なものと言えないのは、村民を含め村と関わる人の自律的な行動変容ではないか。そのために、村外の川上村応援団なる人々との継続的な関わりを作り、その上で村民と応援団とをつなぐ仕組みが必要ではないか。今日、私自身がオンラインコミュニティかわかみらいを立ち上げ、これまで試行錯誤を続けてきている中で、改めて実践活動を振り返り、この取り組みの現状と課題について考察してみたい。

#### 4. オンラインコミュニティかわかみらいの挑戦

##### (1) オンラインコミュニティかわかみらいとは

川上村を通じて出会った人と継続的につながれる仕組みの一つとして、川上村の”みらい”を考え行動していくオンラインコミュニティかわかみらいを令和 2 年 7 月に立ち上げた。立ち上げ意図として、川上村の関係人口を手触り感のあるものにしたかった思いがある。川上村だからこそ出会えた人がたくさんいるけれども、つながりは個人的なものに閉じており、価値として村で共有できていないことが多々あった。そこを可視化することができれば、村としてその人とつながることができ、新たな展開につながるのではと考えた。

コミュニティの活動としては、月に 1 度、1 時間程度のオンラインイベントを開催し、川上村に関するトピックをもとに対話を行なっている。コミュニティの当初の参加者は、村づくりを通じて出会った人が中心で、連携先の大学教員やつきあいのある国家公務員、地域づくりインターン事業で来村した大学生などであった。筆者の個人的つながりを軸に参加者集めを行うとともに、イベントサイトに掲載し広く参加を募っている状況である。コミュニティメンバーは、現在 30 名程度であり、各回の参加者は、十数名程度である。このコミュニティでの出会いをきっかけに、川上村を大学の授業素材とする取組も生まれ

ており、新たな交流にもつながっている。運営経費については、参加者含めプロボノ的に関わっており、オンライン会議システムの使用料 2,000 円/月のみとなっており、現状は筆者個人の負担である。

## (2) かわかみらいの参加者の声

参加者の皆さんに、なぜかわかみらいに参加しているか、かわかみらいでどのような話をしていきたいか、かわかみらいに求めることについてお話を伺った。

### 【A さん 村外居住】

かわかみらいは、関係人口づくりの柱になると思い、初回から参加している。もともと川上村とはご縁があったので何かしらお役に立てることがあればと、できる限り参加している。もともと緩いテーマで語り合うコンセプトもあったと思うので、緩い雰囲気はとてもいいと思うし、参加していて居心地がいいのも事実である。将来的には同窓会のような集まりの場を目指してみてもいいのではないだろうか。一方で、もちろん参加するだけでもいいのだけれど、一人ひとりが何かしらの役割・役目が持てるのもっといいと思う。そこには、地域の泥臭さというか、苦勞の部分も皆さんに率直に感じてもらう仕掛けがあっていいと思う。

### 【B さん 村外居住】

友人伝えで紹介を受け参加している。大学教員をしているが、学生がお世話になったり、かわかみらいで出会ったことが縁で違う取組にも反映しているので、そこはとてもいい部分だと思う。一方、参加者がここで何をしていくかが明確になっておらず時折時間だけが経過しているタイミングもある。それはそれで一つの魅力だが、ある程度テーマを決めてみんなでそれを創っていくというのも面白い気がする。オンラインでのつながりは維持しつつ、対面イベントも組み合わせていき、イベントの内容をみんなで考えていくというのも面白いのではないだろうか。その時にわざわざプログラムを用意するのではなく、地域の困りごとを解決していくようなことができれば地域への情報発信にもつながるし、win-win になれていいのではないだろうか。

### 【C さん 村内居住】

時間とタイミングがあった時に参加という形態になっているが、取組としては非常に面白く拝聴させてもらっている。コミュニティは自分が欲しているとき反応が返ってきたりする場所であったら心地よいと思う。その意味では、どのようなツールを使うかは検討も必要だと思うが、slack のようなコミュニケーションアプリでつながるのも一つだと思う。何か質問なりをしたときに返してくれるかはまさに場のデザインに関わってくるのだとも思うが、自分がいられる場所を目指していくのがいいのではないかと思う。

今回は 3 名の方にお話を伺ったが、大きく共通していたのは「参加者が取り組めるテーマがあるといい」ということ、そして「その取り組むテーマを通じて地域と接点が生まれ



るものがいい」ということであった。川上村をハブにして、かわかみらいというコミュニティにおいてまた新たな人と出会い、その場で川上村についてより深く知ることで人と土地に魅力を感じる。そのことは川上村への愛着へと変貌していき、川上村の課題に対してそれぞれができる手段で対峙することで、社会的創発が生まれ関係人口として関わりを持ち続けることにつながりそうだ。

### (3)かわかみらいの展望

人と人が出会い、魅力を感じる人がその地に関わり始める。それが関係人口づくりの第一歩だと考える。その意味でかわかみらいは、川上村をハブに人と人が出会う場であり、人を通じて川上村の自然・文化にふれることができることを中心に運営していくことがいいのではないか。その中で、連帯感を持たせるために緩いテーマを決めて、みんなで考えて実行し、人・自然・文化の魅力を感じることができる。そのことは、川上宣言の「都市や平野部の人たちにも、川上の豊かな自然の価値にふれあってもらえるような仕組みづくり」につながるし、多様な人との関わりが「自然と一体となった産業を育て山と水を守り、都市にはない豊かな生活を築く」ことにつながっていくと考える。

具体的には、来春に川上村を感じてもらおうツアーの企画内容をみんなで考え、実践する川上村での対面イベントを構想している。そして解決する課題は、お宮さんの掃除など人手不足で出来ていない地域の困りごとに焦点を当て、それを解決するプログラムをツアーの体験の中に組み込めると、地域にとっても参加者にとっても win-win なツアーにできるのではないかと考えている。

## 5. まとめ

川上村における交流事業の考察を通して、改めて川上宣言を軸に村づくりを進めてきたことは、川上村にとって大きな価値のあることだと実感することができた。川上宣言があったからこそ出会えた人々、川上宣言があったからこそ定められた方向性、それらはかけがえのない財産である。

一方、出会ってきた人々を村の中で横断的に共有し、継続的につながりを持ち、村の力に変えていく仕組みづくりが不足していることも分かってきた。つながりという一見抽象度の高いものを、具体的な手触り感のあるものに変え、川上を応援してくれる人たちの想いを、村の具体的な課題解決策に落とし込んでいきたい。かわかみらいに参加する人たちに、大小問わず役割を担ってもらい、川上村の水源地の村づくりの一員として活動を始めてもらいたい。

コロナ禍以降、人とのつながり方は多様化している。オンラインツールが一般化したいま、場所の制約を超えてつながることは容易になりつつある。オンラインコミュニティ

は、オンライン上の交流が基本原則だが、オンラインで完結するものではなくリアルでの関わり合いへと発展を目指したものである。図 2 のように、様々な形で出会った人々の居場所としてかわかみらいを用意することで、事業ごとにとどまっていた出会いが事業を超えてつながり、事業同士を結ぶことで広がりを生み出すことができる。多様な人との対話から、今まで想像もしなかったことが生まれることもあるし、川上村を通して出会えた仲間と共に人生を歩

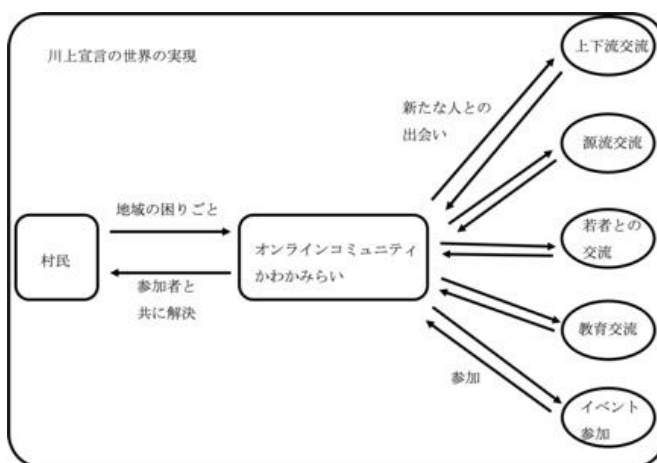


図 2 かわかみらいにおけるつながりのイメージ図

んでいく、その時間にとてつもなく価値を見出す可能性があるのだと思う。

さらに、かわかみらいにおいて地域の解決したい困りごとを集めながら、コミュニティメンバーと共にその課題解決を進めることで地域にとっても目に見える価値となり村民と接する機会にもつながる。そして戻ってこられる場所としてかわかみらいがあることで、継続的なつながりを生み出すことができる。

このような試みを通して、川上宣言の役割を担う人が増え、川上宣言の実現へとつながる。そのためにまずは、オンラインコミュニティには村内外問わず非常に幅広い人々に参加してもらいたいし、私自身も決して無理をすることなくこのコミュニティを生活の一部として運営を続けていきたいと思う。そして、一人一人が何か動きを作って役割を担いながら川上宣言で唱える世界観を実現していくことで、ワクワクする未来をみんなで創っていきたい。このオンラインコミュニティを居場所の一つと感じてくれる人が一人でも増え、ここから新たな川上村を創り出すことを楽しみにし、それに向けて行動を行っていくことを約束し、レポートを終えたいと思う。

【参考文献、引用、ホームページ等】

- ・川上村第三次総合計画 吉野川源流物語(1994 年)
- ・全国「川上」町村連絡協議会 その活動のすべて(2004 年)
- ・川上村過疎地域持続的発展計画(2020 年)
- ・特定非営利活動法人日本上流文化圏研究所 HP<<https://joryuken.jimdofree.com/>>
- ・早川フィールドミュージアムホームページ<<https://fm-hayakawa.com/>>
- ・守重裕和「源流域の人口 700 人の村づくり～教育の観点から村づくりを考える～」(全国地域リーダー養成塾第 29 期)
- ・守重公英「多摩川の源流域から考える地域活性化への可能性～源流の 700 人だからこそできる村づくり～」(全国地域リーダー養成塾第 30 期)